

10:20-10:30

挨拶

竹内 修一 (上智大学教授)

10:30-11:30

「日本における二つの動物供犠」

原田 信男 (国士舘大学 21 世紀アジア学部教授)

13:00-14:00

「タルコフスキー『サクリファイス』をめぐって」

神山 睦美 (文芸評論家)

14:15-15:15

「ミサにおけるいけにえの真の意味を求めて」

具 正謨 (上智大学教授)

15:30-16:30

シンポジウム「共同体における供犠——宗教と文化をめぐる東西の対話——」

原田信男、神山睦美、具正謨 司会：竹内修一

2016年 6月18日 土

上智大学中央図書館 9 階 921 会議室



共同体における供犠

——宗教と文化をめぐる東西の対話——

第44回連続講演会

前売券 5月18日(水)～6月17日(金)

発売所 聖イグナチオ教会案内所(月曜休み)

Tel 03-3230-3509

又は上智大学キリスト教文化研究所

(JR中央線、地下鉄丸ノ内線、南北線 四ツ谷駅下車)

チケット 一日券 一般(前売、当日共): 1,000円

学生(前売): 500円 (当日): 800円

問合せ先 上智大学キリスト教文化研究所

(月～金曜日 10:00～11:30、12:30～17:00)

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1

Tel 03-3238-3540 Fax 03-3238-4145

2016年度連続講演会（第44回）主旨

共同体における供犠——宗教と文化をめぐる東西の対話——

今回の講演会は、“供犠”をめぐって、次のような三つの講演が用意されている。「日本における二つの動物供犠」、「タルコフスキー『サクリファイス』をめぐって」、そして「ミサにおけるいけにえの真の意味を求めて」である。供犠とは、神にいけにえを捧げることであり、それによって、神と人間との関係が成立する、宗教的儀式の一つである。

日本には、確かに動物供犠が存在した——第一の講演は、そのことについて論ずる。日本人は、一般的に農耕民族と言われる。しかし、同時にまた、動物供犠も存在した。確かにそのことを示す資料は少ないが、丁寧に歴史を繙けば、農耕のための動物供犠が行われていたことが確認される。そこには、狩猟獣である猪鹿を捧げる弥生動物供犠と、家畜の牛馬を主体とする大陸的動物供犠があった。

第二の講演は、タルコフスキーの映画「サクリファイス」を取り上げる。この映画は、一人の男アレクサンデルとその幼い息子が、とある北欧の海辺に枯れかかった一本の木を植える場面から始まる。同映画は、チェルノブイリ原発事故（1986年）の直前に完成された。一方、私たちは、2011年に福島原発事故を体験し、今もってその収束・解決の見通しさえ見えていない。核戦争の恐怖から、愛する家族やその他の人々を救おうとするアレクサンデル。彼の犠牲は、いったい何を意味するのか。そのメッセージが問い掛けられる。

最後は、キリスト教における最大の供犠、すなわち、イエス・キリストの十字架による贖いの秘儀が検討される。イザヤ書52章13節から53章12節においては、いわゆる、「主の僕の苦難と死」が語られる。この僕は、自らのいのちを賭して、民を罪から解放し、真のいのちへの道を開示する。その姿は、神の独り子としてこの世に遣わされたイエス・キリストに重ねられる。イエスは、十字架上で自らのすべてを捧げることによって、人類をその罪から解放し、神との和解を成就する。この出来事は、その後今日に至るまで、カトリック教会において彼の記念として執り行われている——ミサ。